

微生物学ベーシック演習

科目責任者：増 田 道 明（微生物学講座）

I. 前 文

微生物学は感染症の理解の基礎となり、臨床医学における意義も大きい。一方、系統的な理解ができず、学習に困難を感じる場合もある。この科目は、記憶の定着率が高く学習効果が高いとされる反転講義形式をとることで、微生物学への苦手意識を解消し、臨床医学において重要な位置を占める感染症の学習を円滑に進めるための基礎をしっかりと作ることを目的としている。

II. 受入可能人数

若干名。「微生物学」の仮進級該当者は受講を強く勧奨する。

III. 担当教員

増 田 道 明（微生物学）

IV. 学習内容

10コマの授業を実施する。日時は、受講者と相談の上、決定する。

担当教員が事前に提示した課題について、受講者は各自の学習内容に基づいてプレゼンテーション用のファイルを作成する。授業に際しては、そのファイルを用いてまず受講者が解説を行う。担当教員はその解説内容に関して質問し、受講者が回答する。必要に応じて、担当教員が補足説明や事後学習課題の提供などを行う。

V. 学修の到達目標

ヒトの疾患の原因となる病原微生物について理解を深めることができる。
臨床感染症学の効果的学習に必要な基礎知識を再確認することができる。
自身の学習内容を整理し、他者に説明する能力が高まる。

VI. 成績評価の方法・基準

成績評価は、作成したプレゼンテーション用ファイル（10%）、授業の際の説明内容（10%）、質問に対する回答（10%）および全授業終了後に実施する筆記試験（客観問題と記述問題とを含む）（70%）の結果を総合して判定する。

VII. 使用する教材・資料など

プレゼンテーション用ファイルの作成に際し、微生物学関連の書籍、学術論文、インターネット情報等を適宜活用することを推奨する。具体的な選択については、担当教員が助言を行う。

VIII. 質問への対応方法

質問は、微生物学講座（基礎医学棟3階）で対応するほか、メール（m-masuda@dokkyomed.ac.jp）でも随時受け付ける。

IX. 求められる事前学習、事後学習 *（ ）内は所要時間の目安

事前学習：各授業の際に用いるプレゼンテーション用ファイルの作成と内容の理解（120分）

事後学習：各授業の際の担当教員による補足説明の内容について微生物学関連の書籍、学術論文、インターネット情報等を用いて理解を深め、事後学習課題を行う（120分）。

X. コアカリ記号・番号

A-2-1), A-2-2), B-1-9), C-1-1), C-1-2), C-3-1), C-3-2), D-2-4), D-6-4), D-7-2), D-7-4), E-2-1), E-2-2), E-2-4), E-5-3), F-2-8)

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

授業の際のプレゼンテーションについては、その都度フィードバックを行う。最終成績については教務課に提出し、教務委員会と教授会の議を経た後、所定の方法で可否に関するフィードバックを行う。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	○
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	